様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１３２３１

研究課題名（和文）自閉症児の関係障碍の形成要因検証：情動刺激への認知的バイアスの観点から

研究課題名（英文）Examining the Formative Factors of Relational Impairment in Autistic Children: From the Perspective of Cognitive Bias Toward Emotional Stimulation

研究代表者
榊原　久直（SAKAKIHARA, HISANAO）

京都教育大学・教育創生リージョナルセンター機構・講師

研究者番号：９０７５６４６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：子どもの“心的状況の読みとり”をする養育者側の能力が，どのような関係性やその歴史，認知的なバイアスの影響を与えるのかについて検討を行った。
その結果，一般人（大学生）の場合，子どもがASD特性を有するという“障碍という認知のバイアス”を誘発した場合，子どもの“あいまいな感情表出”に対しては，よりネガティブな感情だと，より強く評価しやすい傾向が見られた。他方，保育士・教師の場合，子どもの“ネガティブな感情表出”や“あいまいな感情表出”に対して，その感情をネガティブな感情だとは評価しなくなる傾向や，感情や意図の強さをより弱く評価するという傾向が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の知見は，自閉スペクトラム傾向を有する子どもの子育てや保育・教育の中で，養育者や保育者・教師らが暗黙的に有しているバイアスの存在を明らかにし，それらが子どもと大人との関係性を歪めているメカニズムについて説明するものである。それらは同時に，自閉スペクトラム傾向のある子どもたちが十分に受けられていないケアであったり，彼らと関わる養育者や保育者・教師の抱える苦悩を示唆するものでもあり，その両者を支援し，ひいては子どもの発達を保障する際に留意すべき点を示唆する重要な知見であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：I examined how the relationship, its history, and cognitive biases affect the caregiver's ability to "read the mental situation" of the child.
The results showed that, when the "cognitive bias of disability" induced by the child's ASD characteristics, the general public tended to evaluate the child's ambiguous feelings as more negative and stronger than those of the child. On the other hand, when the children's negative or ambiguous emotions were induced, the childcare workers/teachers tended not to evaluate them as negative emotions, or to evaluate the strength of the emotion or intention as weaker.

研究分野：特別支援教育

キーワード：関係障碍　関係発達　自閉症　メンタイゼーション　スティグマ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本には約 120 万人の自閉スペクトラム障碍児者がいるとされ，近年発達障碍への関心は高い。そして様々な障碍特性の説明や対処法が広まり，個人の行動上の理解が進んだ反面，行動の背景にある心の動きが理解されにくい現状がある。

個人に何らかの障碍がある時，その対人関係は負の様相を孕みやすい。負の関係の積み重ねは発達の契機を阻害し，障碍特性の強化や問題行動の表出へと繋がる（関係障碍）。従って障碍は関係性全体を取り巻くものであり，他者との関係の中から障碍児者を理解する必要がある。すなわち障碍児者の行動特徴の全てが生得的な障碍によるものではなく，付加的に膨らんでいく障碍を抱えながら，他者と生きる中で生じた心の動きの表れとして理解する視点が必要である（小林・鯨岡，2005）。特に対人関係の障碍を中核とする自閉症においては，こうした関係障碍の部分が大きいと考えられている。

発達心理学において自閉症の中核とされる対人関係の障碍，なかでも，他者の心的状況に対する理解の困難さに代表される「心の理論」の障碍に関心が集まり，近年では，そうした特性の形成プロセスにも研究がなされ，能力の獲得不全および発達不全の可能性が検討されるようになってきている。ではいったい，子どもの抱える関係障碍は，どのような要因によって形成され，また，どのようにして改善が可能であるのだろうか。その点は未だ十分に検証がなされていない。

また，対人場面における困難さを抱える自閉症児者であるが，特定の相手との愛着関係や共感関係の成立が，自閉症児者の他者概念，自己認知や象徴機能の発達を促すことが明らかになってきている（別府，1994）。また近年，子どもの援助において， Jernberg et al. (2009)の Theraplay や Powell et al. (2009)の Circle of Security など，子ども個人のみを対象とするのではなく，養育者や保育士，施設職員などの“身近な他者（関与者）”を巻き込み，関係性全体の変容を促すことに国際的な注目が集まっている。しかしこれらの援助において 2 点の課題がある。１つ目は，障碍や病気など，特定の困難さを抱える者たち固有の関係性の知見が乏しい点である。それは特定の疾患に関連した関係性や関係障碍の共通性を検討する必要性があるとも言える。２つ目は，子ども・関与者それぞれの特性が，他方に与える影響の検討が不十分な点である。関係性の不全や関係障碍の形成要因を，相互作用的視点から再検討する必要性がある。

他方で，自閉症児の養育者に抑うつ傾向や発達障碍傾向などの問題があるとの指摘がある。しかし自閉症児と関わり続けることが関わり手の情緒的な消耗を生むという指摘もあり，子ども側の障碍特性と同じく，その全てを遺伝的要因に帰属することはできない。関係性の中で子どもだけが発達を阻害されているのではなく，関与者側も発達が阻害されていたり，心理機能の停止・低下が生じる可能性も指摘されている。ゆえに，関係障碍の形成に限らず，改善要因としても，関与者の内的な要因とそれに障碍が与える影響を検討する必要があり，このことが本研究の根幹にある問いである。これらを明らかにすることによって，子どもの発達を守り，保育や教育，福祉など種々の支援の質的向上に資することが期待される。

では，子どもとの関係で養育者側に求められる機能の中核とは一体なんなのであろうか。近年，関係性に影響を与える関与者側の要因として“子どもの心的状況を読みとる関わり手の能力”が中核的なものであると考えられるようになってきている。この関与者側の能力は子どもの安定したアタッチメント関係，ひいては心の理論の獲得に寄与する社会性の発達や認知発達を促すとされ，種々の精神疾患の予防因子としての注目されるものである。加えて，心的状況の読みとりは，子ども・養育者側の双方からの関わり合いを促進する，関係性の好循環を生み出す心理機能の一つであると考えられるものである。しかしこの心理機能に関する研究では，観察法によるビデオ分析による測定が中心であるため，調査にかかる労力が多く，未だ十分な知見が集積されていない。加えて，“障碍”を巡る影響の検討がなされてこなかった。そこで本研究では，申請者が前科研費研究にて作成したオリジナルのビデオクリップを用いた簡易測定法を利用することで，自閉症児の関与者における本心理機能とその影響要因の検討を行う。

２．研究の目的

本研究では，子どもの「内的状態の種類」と「内的状態の強さ」を評定するという，心的状況の読みとり能力簡易測定ツール(以下，簡易測定法)を用いて，関係障碍の形成・改善要因の検討を行うことを目的とした。具体的には障碍という認知や自閉症児とのかかわりの経験，保育効力感などの要因と，情動の読みとり能力の関連性（子どものどのような種類や明瞭さの情動表出に対して，情動の種類の誤認や過大評価・過小評価が生じるのか）を検証した。

３．研究の方法

子どもの心的状況の読みとりに関する大人の能力を簡易に測定するツール（3 か月児・9 か月児の各 5 種類のビデオクリップを使用）を基に，子どもの「内的状態の種類」と「内的状態の強さ」を評定した。

調査対象者は，一般人（大学生）群，保育者・教員・その他の障害福祉に関わる支援者群の大きく分けて２群を対象とした。

また，両対象群のそれぞれに対して，統一のビデオクリップを使用し，（１)映像に映る子どもが自閉スペクトラム症児であるという認知的情報を与えた上で評定を行う場合と，（２）映像に映る子どもについて障害特性の有無についての認知的な情報を与えない状態で評定を行う場合の２パターンに群分けを行い，その評定結果の比較を行った。

４．研究成果

その結果，一般人（大学生）の場合，この子どもはASD特性を有する子どもであるという“障碍という認知のバイアス”を誘発するような先行情報を提示しても，子どもの明瞭な感情表出に対しては感情や意図の読み取りに差は生じなかった。その一方で，大人によって読み取りに差が生じやすい，子どもの“あいまいな感情表出”に対しては，よりネガティブな感情だと，より強く評価しやすい傾向が見られた。

他方で，保育士・教師の場合，一般人と同様に，子どもの明瞭な感情表出に対しては差は生じなかったが，子どもの“ネガティブな感情表出”や“あいまいな感情表出”に対して，その感情をネガティブな感情だとは評価しなくなる傾向や，感情や意図の強さをより弱く評価するという傾向が見られた。

これらの結果から，自閉スペクトラム傾向を有する子どもの子育てや保育・教育の中で，養育者や保育者・教師らが暗黙的に有しているバイアスの存在が明らかとなった。また，それらが実際に子どもと大人との関係性をどのように歪めているのかが示された。障害についての認知は，障害のある子どもを持たない，かつ障害のある子どもに関わる仕事に就いていない一般人に対して，子どもらの自然な感情表現のうち，よりあいまいな刺激に対して，障害を起因とする否定的な反応であるという認知を，より強く捉える傾向を生んでいた。その一方で，障害のある子どもと関わる支援者の場合，そうした子どもらの表出をより否定的ではないと受け取り，またその感情の強さも弱く見積もる傾向が明らかとなった。ある意味で子どもの障害ゆえに，子どもらの否定的な感情を過小評価したり，否定的な状態を恒常的なものとして評価する傾向が生じていた。こうした傾向は，自閉スペクトラム傾向のある子どもたちが十分に受けられていないケアであったり，彼らと関わる養育者や保育者・教師の抱える苦悩を示唆するものでもあり，その両者を支援し，ひいては子どもの発達を保障する際に留意すべき点を示唆する重要な知見であると考えられる。

また，一連の研究成果を研究室のホームページを介して公表するとともに，保護者向け研修や職員研修を通じて，発達的な凸凹さを抱える子どもとの関わりにおいて，発達特性という視点からだけでなく，同時に，一人の人間として，愛着関係の視点から子どもと自分との関わりを捉えられるようにすることを目的とした研修活動を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 榊原久直	４．巻 16
２．論文標題 温もりのある子ども・保護者支援に向けて―コロナ禍における虐待予防・ハラスメント予防の愛着臨床	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神戸松蔭こころのケア・センター 臨床心理学研究	６．最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榊原久直	４．巻 15
２．論文標題 子どもと家族の“願い”に応える地図を共に描く試み ―関係発達から見つめ直すサービス等利用計画と個別支援計画―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 神戸松蔭こころのケア・センター 臨床心理学研究	６．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榊原久直	４．巻 14
２．論文標題 親子を支える多機関・多職種連携臨床における心理職の役割　―支援者支援の視点としてのアタッチメント理論―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神戸松蔭こころのケア・センター　臨床心理学研究	６．最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榊原久直	４．巻 15
２．論文標題 子どもと家族の“願い”に応える地図を共に描く試み ―関係発達から見つめ直すサービス等利用計画と個別支援計画―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 神戸松蔭こころのケア・センター　臨床心理学研究	６．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榊原久直	４．巻 14
２．論文標題 親子を支える多機関・多職種連携臨床における心理職の役割　―支援者支援の視点としてのアタッチメント理論―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神戸松蔭こころのケア・センター　臨床心理学研究	６．最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 榊原久直
２．発表標題 子どもと養育者を支える多職種での事例検討の枠組みを考える
３．学会等名 心理科学研究会2022年春の研究集会フリーテーマⅤ
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤祐昌・榊原久直・鈴木華子・田中健史郎・日野映・藤野陽生・古川祐之(企画・討論者)
２．発表標題 SDGsと心理臨床
３．学会等名 日本心理臨床学会 第41回大会．若手の会企画シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 加藤祐昌・榊原久直・鈴木華子・田中健史郎・日野映・藤野陽生・古川祐之(企画・討論者)
２．発表標題 若手心理臨床家は何を感じ、何を求めるか
３．学会等名 日本心理臨床学会 第41回大会．若手の会企画シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 榊原久直・寺見陽子・小椋たみ子・久津木文
２．発表標題 子どもの発達を保障するためには何が必要か―保育と家庭養育に焦点をあてて―
３．学会等名 日本発達心理学会 第34回大会．ラウンドテーブル
４．発表年 2023年

１．発表者名 山根隆宏・石本雄真・榊原久直
２．発表標題 単一市内施設調査による障害児通所事業の実態と課題（１）保護者調査を通した感情調整の問題と連携の難しさの観点による検討
３．学会等名 日本発達心理学会 第34回大会．ポスター発表
４．発表年 2023年

１．発表者名 榊原久直・山根隆宏・石本雄真
２．発表標題 単一市内施設調査による障害児通所事業の実態と課題（２）障害児の情緒・行動の問題と支援者の精神的健康の関連
３．学会等名 日本発達心理学会 第34回大会．ポスター発表
４．発表年 2023年

１．発表者名 石本雄真・榊原久直・山根隆宏
２．発表標題 発達障害児の感情の問題に焦点をあてた研修の効果－単一市内の障害児通所支援施設を対象として
３．学会等名 日本発達心理学会 第34回大会．ポスター発表
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hisanao Sakakihara
２．発表標題 Modification of Autistic Children in the Relationship with Identified Others
３．学会等名 International Congress of Psychology 2020（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 榊原久直，浅井映美子，米田なおこ，原口喜充
２．発表標題 保育者と心理職の協働は保育現場に何をもたらすのか キンダーカウンセラー・保育カウンセラーという保育者を支える者に焦点をあてて
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 酒井佐枝子・榊原久直・毛利育子
２．発表標題 自閉症スペクトラム症児の養育者への「安心感の輪」子育てプログラムの実施とその効果検証(1)養育者の心身状況及び子どもの行動理解に関する量的検証
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 榊原久直・酒井佐枝子・毛利育子
２．発表標題 自閉症スペクトラム症児の養育者への「安心感の輪」子育てプログラムの実施とその効果検証(２)ビデオ観察データからみる関係発達の探索的検討
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 榊原久直
２．発表標題 関係発達の現場で支援者はどのように変わるのか―療育活動と教育相談に参加した保育士の単一事例報告より
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 浅川淳司・近藤龍彰（編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 216
３．書名 心理学論文解体新書 論文の読み方・まとめ方・活用ガイド	

１．著者名 藤本浩一，金綱友征，榊原久直	４．発行年 2019年
２．出版社 サイエンス社	５．総ページ数 326
３．書名 読んでわかる児童心理学	

１．著者名 須田治(編)、本郷一夫(監修)、須田治・川田学・松熊亮・小野學・榊原久直・東敦子・佐竹真次(著)	４．発行年 2019年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 120
３．書名 生態としての情動調整	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関